

第九十七回 日本医史学会総会 演題目次

会長講演

開拓使時代の医療……………吉田 信……………(6)

特別講演 ①

蝦夷地とロシア——北辺医史学の背景としての日露関係……………秋月俊幸……………(12)

特別講演 ②

現代ウイルス学よりみたジェンナーの論文と伝記について……………加藤四郎……………(18)

一般口演

1 原始巫医の世界的普遍性の考察……………奥富敬之……………(22)

2 憑きもの再論……………岡田靖雄……………(24)

3 岸田吟香が中国で販売した日本関連の古医書……………真柳 誠・陳 捷……………(26)

4 淳于意伝記考……………猪飼祥夫……………(28)

5 『清医胡兆新問答録』——一八〇四年の中国医への問答報告書について——

……………郭 秀梅・真柳 誠……………(30)

6 中国古代人体内景図に於ける脂膜、脂膜について……………高島文一……………(32)

7 新発見の馬玄台『難経正義』……………王 鉄策・真柳 誠・小曾戸 洋……………(34)

8 谷野一栢著『難経抄』所引医書について……………宮川浩也……………(36)

9	浅田宗伯と黄遵憲……………	陳	捷……………	(38)
10	『傷寒論』の「煎・熬」に対する「方言」による解釈……………	岡田研吉・郭秀梅……………		(40)
11	素問・靈枢に於ける血管及び血管病の記載について……………	家本誠二……………		(42)
12	漢代の医療技術について……………	和田裕一……………		(44)
13	中国十六世紀以前の瀉血療法……………	友部和弘・真柳誠……………		(46)
14	中世における瀉血……………	藤倉一郎……………		(48)
15	歯髓の歴史……………	西卷明彦……………		(50)
16	澁江長伯が蝦夷地で採集した植物標本について……………	山岸喬……………		(52)
17	津軽における貞享、元禄年間のケシ栽培の実態……………	松木明知……………		(54)
18	森沢園苑の書簡類——伊沢柏軒、小島宝素、喜多村直寛、多紀元琰・元信等……………	町泉寿郎・小曾戸洋……………		(56)
19	蘭門五哲の書幅……………	小曾戸洋・町泉寿郎……………		(58)
20	北里柴三郎口述中川愛咲編纂「伝染病研究講義」の内容及びインフルエンザ菌の発見について……………	会田恵・田口文章……………		(60)
21	卵管の発見者、ガブリエーレ・ファロッピオについて……………	藤田尚男……………		(62)
22	チンチョン伯爵夫人とキナ渡来伝説……………	泉彪之助……………		(64)
23	『医語類聚』(奥山虎章)と <i>Medical Lexicon</i> (Robley Dunglison)……………	深瀬泰旦……………		(66)
24	北陸における法医学の源流……………	寺畑喜朔……………		(68)
25	『裁判醫學提綱』にみる「狂」の用語について……………	小曾戸明子……………		(70)

26	吉村喜作博士とバビンスキー徴候……………	田代邦雄……………(72)
27	日本プロテスタント・ミッシヨン医療伝道の方針転換についての一考察……………	高安伸子……………(74)
28	釈迦とキリストの患者の治療の実態について……………	杉田暉道……………(76)
29	広島原爆救護活動補遺……………	江川義雄……………(78)
30	一七二一年、ボストンにおける天然痘流行と人痘法の施行……………	小田泰子……………(80)
31	ジェンナーをめぐる二、三の話題……………	石田純郎……………(82)
32	フラカストロの伝染理論……………	伊藤和行……………(84)
33	山本致美訳『扶氏診断』と島村鼎甫訳『扶氏診則』……………	津下健哉……………(86)
34	足立長雋の訳書『産科礎』の成立年代……………	石原力……………(88)
35	華岡青洲及び春林軒塾に関する岡山県内資料……………	中山 沃・石田純郎……………(90)
36	高岡長崎家の子弟教育について―四代蓬洲、五代浩齋を中心に……………	正橋剛二……………(92)
37	デンマークの師・マッセン博士に宛てた野口英世の書簡……………	石黒達也……………(94)
38	児玉信嘉宛野口英世16書簡……………	石原理年……………(96)
39	高坂駒三郎と旧蔵書簡―森鷗外書簡など……………	小田皓二……………(98)
40	森鷗外のライブチツヒにおける衛生学研修……………	武智秀夫……………(100)
41	日本消化器病学会発足の頃……………	大村敏郎……………(102)
42	初期の皮膚科学における東大と京大……………	長門谷 洋……………(104)
43	アルブレヒト・フォン・ローレツの「皮膚病論一斑」……………	今泉 孝……………(106)
44	永坂石埭(周二)の小伝と日本整形外科への功績……………	蒲原 宏……………(108)

45	明治前期における医師試験制度と奉職履歴医について	樋口輝雄	(110)
46	一八八八年の医学校処分について	黒澤嘉幸	(112)
47	財団法人・日本医学専門学校の学校騒動と私立東京医学専門学校の独立分離	唐沢信安	(114)
48	明治女医史の基礎的研究	三崎裕子	(116)
49	明治廿六年医科大学国家医学講習科実録(学生記録)	石崎達	(118)
50	太田正雄(木下李太郎)の医学ノートについて	黒川一郎・島田保久・吉田信	(120)
51	徳川昭武公の『順天堂入院日誌』について(第二報)	中西淳朗	(122)
52	中国伝統医学と道教(XVII)『三国演義』から	吉元昭治	(124)
53	民間急救療法	谷津三雄・渋谷敏	(126)
54	日本における作業療法の歴史	吉見契子・鈴木明子	(128)
55	「看護」という言葉の使用のはじめ(第一報)―看護という言葉はいつから使われるようになったか―	平尾真智子	(130)
56	我が国の顕微鏡の由来―和田医学史料館所蔵の顕微鏡の歴史―	和田和代史	(132)
57	赤城信一について(第一報)	上田智夫・小竹英夫・宮下舜一	(134)
58	札幌痲毒院について	島田保久・横田一郎・黒川一郎・片岡是充・長瀬清・吉田信	(136)

発表日時

会長講演・特別講演①・一般口演1〜32 平成八年六月二十二日(土)

特別講演②・一般口演33〜58

〃 六月二十三日(日)

〈本号の表紙絵〉

開拓使札幌本庁舎

開拓使札幌本庁舎は開拓使顧問のアメリカ人、ホーレス・ケプロンの案により、明治5年(1872)7月着工、6年7月上棟式を挙げ10月に完成した。ケプロンの設計ということになっているが、実際はホルト等の手になったものとされている。場所は現在の北海道庁構内の赤レンガ庁舎の北側、現庁舎の東側前方である。木造2階建の洋風建築で、建築面積約558m<sup>2</sup>(168)坪、屋上に八角ドームを上げている。この工事費は32,000円で、東京から大工、木挽、鍛冶等の職人1,200余人を募集し、工作場と職人を収容するために新たに小屋60棟、建坪4,320坪を建築した。

この画は御雇技師ホルトが描写したもので、広漠とした構内に聳立した洋風建築、八角ドームの上には北辰旗がひるがえっている。

この庁舎は明治12年(1879)1月失火で全焼し、再建した庁舎が通称赤レンガと呼ばれているものである。 (島田 保久)